

その世界史の著作に従つたのである。然らば彼は歴史事件そのものを、如何に考へて居たかといふ事が次の問題である。殊に歴史事件の發生する原因を如何に解釋したかといふ事は、彼の研究的態度と、並びに彼の叙説の態度とに對する、根本的條件として考究されなければならない點である。

註一、Pol. 6, 11.

註二、Ibid. 8, 10.

註三、Thucydides. 3, 82; 1, 76; 5, 43; 3, 84, etc.

國境の研究 (下)

文學士 下田禮佐

三、言語

交通機關の進歩、戰術の變遷に伴ひ、大山脈、大河も障壁としての價値を大に減じた。即ち地文的國境は已に過去の境界である。言語は之に代るべきものとして今正に流行の中心たる觀がある。勿論言語はその分化については前述の如く氣候が大なる影響を及ぼすものであるし、發達、興亡に

ついては政治上その他の原因によることが多いものであるから、言語を以て境界線決定の獨立的、最後の要素とは見做しがたいけれども、氣候、政治その他の理由による言語の分化、發達、興亡は數百年間に起る變化であるから、過去に於ける政治上の衝突、壓迫等に就ては、言語の相違が直接且つ第一の原因をなしたことが多いのである。殊に世界大戰以來歐洲の一般の思想では、單に或る種

の言語を話すといふ事實が、その民族の正當なる政治上の歸結を決定するのみならず、その民族の人種及び祖先をも示すものであるとしてゐる。

(1)ここに注意すべきことは、ごこの國でも、二種の言語が用ひられることである。即ち *Milingualism* である。例へば我が國でも琉球や鹿兒島の人はその方言の外に標準語を解する。支那は到る處方言が違ふが、官話ならかなり廣く通ずる、又口語でなく文語なら更に廣く通ずる。米國の如きは、文語には勿論英語であるが、各家庭では、ドイツ語、スエデン語、ノルウェー語、オランダ語、ニグロ語の轉訛など各種の言語又はその轉訛した語が用ひられる。フランスの如き民族の單一な國でも、口語としては各地夫々特有の方言がある。但し教育の普及に由て國民凡て標準語たるフランス語を讀み、書き又解することが出来るのである。

かく同一民族が二種の言語を用ひるには二つの

理由がある。(一)交通の不便、孤立、隔絶による同一言語の分化。(二)異民族の混合接觸である。勿論この二原因共に存する場合が多い、例へば支那の如きはそれであるが、我が國の東北と鹿兒島の方言の相違の如きは主として(一)によるであらうし、米國で各人特有の言語と共通の英語とが語られるのは(二)の理由によるのである。歐洲に於ては、民族大移動が重要原因をなして居る。即ち當時ローマの軍隊や、ゲルマニ、スラヴ、アジャ民族などの侵入者が、全歐洲に各種の言語を蒔きちらした。それが中世になると、民族の移動は少く遠隔地との戦争も稀であるし、勿論郵便や印刷の方法がないから文語の廣まることもなく、又文語を用ひる場合は稀で偶々書くといへば、國際的言語たるラテン語やアラビヤ語によるから言語が統一されることなく、民族大移動に由てバラ蒔かれた各種の言語は無數の方言に分れ、各町村各特有

の方言があつて、人々は隣り村の語も充分解らないといふ有様であつた。然るに第十世紀頃から一般文化の發達、中央集權的國家の成立等に由てその中のある方言が、政治、文學、商業及び上流社會の言語として廣く用ひられ、隨て他の方言に對して優越的地歩を占めることとなり、それが國家民族の發展と共に、益々優勢となり、遂に、英獨佛の如き壓倒的優越なる言語を生ずるに至つたのである。

かく民族大移動で各地に方言を生じたが、又近世農村移民に由て、各地に特殊的言語の集團的斑點を生じたのである。例へば、スペインやサルヂニヤにフランスのプロヴンスの方言の島が出来、バルカンの各地にルーマニヤ語や、アルバニヤ語の斑點が出来、ドイツ語の如きは東の方遠くヴォルガ河畔まで各地に島を作り、遂に今日では正確な言語上の境界線を引くことを不可能ならしめて

しまつた。

かくて到るところに二種の言語が用ひられることになり、即ち上流語、又は標準語、文化語ともいふべきものがかなり廣く用ひられ、各地方には夫々下流語方言又は地方語ともいふべきものが日常使用される、之等方言は、文化語と姉妹關係のものもあれば、又全く無關係のものもある、或る地方では専ら用ひられ、特に農村では殆ど文化語の存在さへも知られない程であるが、上流社會からは擯斥され、文章に用ひられることは殆どないものである。

かくて方言又は地方語 (Vernaculars) ともいふべきものは、元來近隣の地方語と同一語原から分化したものであるから、今日歐洲邊では田舎を旅行して、例へば、伊佛、佛西、獨蘭などの國境をこえても、その國境によつてさほど著しい言語の相違を認めない。元來文化語又は標準語ともいふべ

おももの (Cultural Language) は、地方語と同一地域の同一民族に併用されてゐるから、必然的に相互に大なる影響を及ぼし、たとひ兩者同一語原の言語でなくとも、單語、發音、文法などが混同し、終には地方語がその國民の文化語たる性質を有する様になり、國民的のグループに分れ、時としては國境にそうて相互に異なる言語が成立するのである。かくてドイツ語、フランス語、英語などの Cultural Language の成立と共に、ドイツ語の一方言ともいふべきオランダ語や、イギリスのゲールック語、その他フランス、スペイン等にも夫々 Vernacular Language が成立し、その中オランダ語や、フレミッシュ語の如き幾分國民的文化語的色彩を有するに至り、國民的境界線成生の要素となるのである。東洋でも久しく漢語が各民族の Cultural, International Language として用ひられ、それが日本語、朝鮮語、安南語等に甚大な影響を

及ぼしたことは人のよく知る處である。

スラヴ語屬民族に於ては、前述の地方語、文化語の關係が充分進化しない、蓋し文化語又は標準語ともいふべきものが、壓倒的勢力を占めるまでに發達しないからである。故にマセドニヤのある村で、セルビヤ語、ブルガリヤ語の何れの方言が用ひられてゐるかは、人々の見解次第で、各民族各我田引水的の解釋を下す、といふのは、凡てのスラヴ諸語は未だ十分分化しない爲に、智識階級の者は平素用ひる言語の外、多少他の言語をも解し得るからである。之實にバルカンに於て民族分界線を引くことの困難な理由であり、政治的擾亂の絶えない理由である。

之を要するにこの國にも、上流語又は文化語或は標準語ともいふべき Cultural Language と、下流語、俗語、方言又は地方語ともいふべき Vernacular Language とある。しかして前者は主として

都市の上流社會に用ひられ、官用語、學校用語、文書、印刷、商業、科學、美術等に同一國民の間に一般に通用する、數世紀の間を通じて、大著述家に由て發達を遂げ、高等なる思想、困難なる問題も之に由て發表されたのである。その分布も廣く、時としては世界各地に及ぶ。即ち國民としての生活に必要な方便である。隨て上流社會の者必ず之を用ひ、その言語をその國の言語とし、國中どこに行つても通用する様に努力する。之に反して地方語は、研究にも、旅行、商業にも役立たない、又之を研究する必要もない、新聞雜誌に印刷されることなく、特に科學の書物に地方語を使ふことなどは絶對にないものであるが、家庭的の親しみある言語として農民の感情上棄てることの出來ないものである。

四、國民主義

國民主義即ち Nationalism or Principle of Nationality といふのは、同一民族を以て一の國家を組織しようといふ一種の愛國心をいふのである。國民主義は、中世に起り、封建制度の頹廢、商人階級の勃興、印刷、歩兵等に由て盛になり、十九世紀以來は一の感情、又は信仰となつたのである。

各國の所謂平民が中世的の貧困、無智、不當なる壓迫から脱却したとき、國民的自負心が目覺めたその上、各國の上流社會の者は、フランス革命の慘禍にこりて、公立學校、徵募兵などを通じて、國民間に國民主義即ち愛國的精神の鼓吹に努め、以て社會組織の急激なる變動を阻止せんとしたので、教育の普及、徵兵制度の採用と共に國民主義は彌が上にも高潮に達したのである。國民主義は言語と一致すべきものであつて、「國民」とは、ある言語を話し又は書く民族をいふのである。此の理由からいうて、フランスの愛國者が、フランス

の天然の國境は、海とアルプスとライン河であるといふのは、正當とはいはれない。

ここに最も注意すべきは、國民主義の基礎たる言語は、文化語か、地方語か、といふことである。一八八〇年までは、各國とも上流社會が國家及びその思想を指導し、隨て國民主義といへば、文化語の行はるゝ廣い範圍を包括し、大帝國を作ることを理想としたものである。ドイツ、イタリーの統一は、文化語を基礎とした貴族的國民主義の最後の結果である。然るに一八八〇年以後下流社會が政治上に勢力を占め、隨て國民主義も、地方語を基礎として大帝國を漸次分解せしむるようになつて來た。その理由とする所はある國民の特有の言語といふのは、下流社會の者が、實際それに由て自分の意見を述べることの出来るものでなければならぬといふのである。この地方語を基礎とした國民主義の運動は、スペインのカタロニヤ、ヴ

イスカヤ、アイルランド、ベルギー等に於て盛であるが、特に東歐では、世界大戰以後、戦争や革命の混亂に乗じて、この小國民主義又は國民主義の小乗運動ともいふべきものが、勢力を得て小獨立國を建てた。蓋し東歐は位置の僻陬と氣候の不良との爲に、文化大に西歐に遅れ、前にも述べた如く、ある一の文化語が、他の多くの地方語に對して優勝するに至らない、それで農民の田舎語が擡頭して、民主的運動と相俟つて遂に勝利を得るに至るからである。東歐は地文的障害もなく、封建制度の發達しなかつた爲に、早く大國が起つたが、之等の大國も文化の進まない爲に、ある一の標準語を確立して、之を文化語として廣く用ひさせることが出来なかつたのである。東歐に於ける文化語不成立の他の一原因は文化語相互間の對抗である。オーデル河及びアドリア海を連ねた一線以東に於て、文化語として用ひらるゝものが、ド

イツ、スエデン、ロシヤ、ポトランド、トルコ及び近年になつてハンガリー及びフランス語の七種に達し、同一地域に數種の言語が用ひられる。例へばフィンランドの學生は、スエデン語、ドイツ語、ロシヤ語を使ふ。故にこの國へ行つても、ある一種の文化語が絶對的優勝してゐる處はない。

然るに東南歐洲特にバルカンでは、以前の公用語たるトルコ語は文化語として用ひられる價值がないので、その上に山嶽重疊して地文的境界が多い爲に、全く系統を異にした地方語が相隣り同志に存在し、そこで最近數十年間に地方語を基礎とした小國民が成立し、それら小國民は文化語として、僅に上流社會のみに知らるゝ遠隔地の言語を借りて來た、即ちルーマニヤ、ギリシヤはフランス語、セルビヤ、ブルガリヤは佛、獨兩語を用ひてゐる。しかしてモンテネグロアルバニヤに至て

は未だかゝる文化語を必要とするまでに文化が發達してゐない。

かく東歐に於ては、文化語同志の對抗、近世の殖民等の爲に、大抵の地方に數種の言語が用ひられ、大ロシヤを除く外、一種の言語が優勝的地位を占むる處はないのである。しかして人は各自己の最好む言語を基礎とした國民を組織せんとするものであるから、東歐の如く言語の混亂した處では、階級に由て國民が分裂する傾きがある。例へばフィンランド語しか知らないフィン人の農民は、フィンランドの獨立を主張する、勿論フィンランド語が、文學もなく、商業上、學問上不便でもあまり困らない。之に反してスエデン、ロシヤ、ドイツ等の言語を解する上流のフィン人は、之等の國の一國と結合を希望する、即ち言語の争は、階級闘争となる。世界大戰及びロシヤの革命の原因の一は、確に東歐に於ける文化語と地方語との争、即

ち上流と下流との階級争、換言すれば、大國主義と小國主義の争にあつたと言へる。而して、その結果は小國主義の勝利に歸したのである。協商國が、中歐同盟國を破り又は之を無力ならしむるに用ひた最も有效な手段は、「民族自決」又は「小國民の權利」といふ名を以て、ドイツ語以外の言語を地方語として用ひる小國民を離叛せしむることであつた。この政策は埃匈國を土崩瓦解せしむるには最も有效であつた。過激派政府が聯合國を賣つたときに、聯合國は之をロシヤに適用した。ロシヤの周圍、ロシヤに侵入し得る道には、フィンランド、アルハンデル、シベリヤ、コーカサス、ドン地方、クリミヤ、ウクライナ、ポーランド、白ロシヤ、リシアニヤ、ラトヴィヤ、エストニア等の小國が組織され、所謂「衛生線」(Cordon sanitaire) が赤色ロシヤの周圍に繞らされた。苟もロシヤ語と異なる地方語の用ひらるゝ處には盡く新

國が出来たのである。勿論之等諸國の多くはいつの間にか泡の如く消え去つて、その後には、反古紙に等しい數種の紙幣、考古學者を喜ばすべき郵便切手、スタンプ及び血痕を残したに過ぎない。然し過激派對抗策としては随分有效であつたのでそれら地方の上流社會の者は、モスコの過激派の壓迫を免れる爲に、各自分の地方の農民の地方語主義に加擔したのである。若し之等小國民にして西歐諸國語をその文化語として採用しなければ、過激主義の資本主義化し、インテリゲンチアの權力の恢復さるゝと共に、之等地方語を基礎とする小國は漸次大ロシヤの巨腕に抱かれ、五年を出でずして全部ツブされるだらうといはれてゐる。今已に獨立國の取扱を受けてゐるのは、ポーランドとフィンランドだけである。之を要するに、國民主義は世界の地圖の上に二様の作用をしたのである。即ち一八八〇年まで上流社會が勢力のあつた

ときは、文化語を基礎として、大國主義、軍國主義であつた。一八八〇年以後民主主義の擡頭と共に、國民主義は地方語を基礎とする小國主義に變じ、世界の大戦及びロシアの革命に際し、西歐諸國はこの主義を以て中歐帝國及び過激主義を崩壊せしむる第一の武器として成功したのである。即ち境界は言語主義から地方語による國民主義に變じつゝある。

五、文化

文化(獨語 *Kultur*)といふのは、富力、信仰、習慣、政治上の形式等をいふのである。習慣といつても、衣食住の習慣の如きは、概ね各小區域毎に異なり、又は各國民のある特殊階級を通じて同一の習慣が行はれ、ある習慣について境界線を引けばそれが互に重なり、又は齟齬して國境としての價值がないことになる。反對に若しある地域が、

民族的政府及びある文化語で久しく統一されて居れば、その習慣は求心力に由て統一され、その結果國民は凝集性と永續性を得ることになる、故にシルフィランは、「文化は國境を作らないが之を強める」といつて居る。(European Political Boundaries, Political science Quarterly, Sept. 1924, P. 475)

文化の中でも宗教は最國境に重大な關係がある。アルバニヤ人の如く未開人の間に於ては同一部落(tribe)の中に、氷炭相容れざる回教徒と耶蘇教徒が混在するが如き奇觀を呈する場合があるが、第十六、七世紀の西歐諸國の文化程度に於ては、宗教的意識は、國家成立の重要な要素であつた。今日は勿論當時ほど宗教心が熾烈でないから國境成立の要素としての宗教の意義も大に減じたけれども、尙白耳義(加特力)が和蘭(新教)と分離し、セルビヤ(正教)が久しくクロアイト人(加特

力)と相反目し、レット人(新教)が姉妹族たるリ
スアニヤ人(加特力)と別個の自治政府を作り、愛
蘭の獨立問題も亦同國人が主として舊教徒である
ことが一原因である等の點から、世界大戰終結の
媾和條約及びその附帶條約に於て、聯合國は舊敵
國は勿論、新興の波蘭、チエツコ・スロヴァキア、
ルーマニヤ、ユーゴスラヴィヤ等に對し、種族
及び言語上少數國民の保護を約せしむると同時に
宗教の自由及び宗教上少數民族の保護を約せしめ
特に、波蘭に對しては、ユダヤ教徒ユーゴスラ
ヴィヤ、ブルガリヤに就ては回教徒、トルコに就
ては耶蘇教徒の平等自由を約束せしめ、之等宗教
上の少數民族を國際的保護の下においたのは注意
すべきことである。宗教的意識が國民的に尙重要
な意義あることは之を以て見ることが出来る、特
に歐洲の二流以下の國民間にその意識の判然たる
を見るべきである。

政治的慣習即ちある民族が選ぶ政治上の形式は
スイスや北米合衆國の獨立の理由となつたもので
ある。中世末期に於てスイス人の好んだ各カン
トンの民會は當時の歐洲の封建的專制政治に對して
著しい對照をなし、確かにスイスの獨立を理由づ
けるものであつた。自由平等をふりかざした十三
州の旗幟は、各種の因習、傳統、階級に束縛され
た歐洲の國民に對し、獨立の價値があつたことは
うたがひない。然るに米國の方は兎に角として、
スイスは近世の國家組織の必要上漸次各カント
ンの自治權を殺ぎ、近代的中央集權的共和國とな
り終た。しかして周圍の諸國は漸次民主的となつ
て、スイスと周圍の諸國とのコントラストは失は
れ、スイスはその存在の理由を失ひ、一方言語上
の關係はその統一國家としての存在を脅かしつゝ
ある。識者がスイスの今後よく五十年の餘命を
保つや否やを疑ふのは理由ありとすべきである。

又ある地域がその文化に於て他の地方に優越するときは、その地方が全國に對して指導的地位に立つ、例へば米國の東北部及び大湖地方、チェッコ・スロヴァキヤのボヘミヤ、北伊太利の如きそれである。然しその地域が人口に於て全國人口の過半に達しない時は、例へば、愛蘭のアルスター、西班牙のカタロニヤ、ヰイスカヤの如き場合は、他の地方に對して自治を要求する、蓋し政治上の自由を求め、他の農業地方の爲に徴收される課税の負擔を免れんとするのである。

六、政治的國境

政治的國境といふのは何等自然的障害又は種族、言語、宗教、慣習等の理由なく、全く政治上の便宜又は權力に由て定められるもので近世まで、國境は主として之に由て定まつたものであるが、今はかゝる境界は追々整理され、特に世界大戰に由

て、純粹の政治的國境から成り立つ埃匈國及びトルコが崩壞してその最後の標本を失つた譯である。然し極東地方の國境、例へばシヤムの東西兩境、支那とロシア、特に樺太に於ける日露國境の如きは、政治上の便宜といふより外説明の方法がない。政治的境界にも色々の種類がある。(一)帝國の興廢即ちある部族又は民族、國家が盛になれば征服、買收、併合で國境が進展するし、衰頹すれば後退する、支那歴代の國境はその例であつて、支那には古來一定した國境はないのである、米國の、膨脹亦それである。從來の歐洲の國境の移動も、フランス、オーストリア、スエデン、デンマーク、ポーランド、トルコ等の盛衰によつたことが多い。特に東歐の地圖はポーランド、トルコ兩國の進退に由て幾度か變更された。(二)統治上の便宜又は經濟上の利害關係によるもの、元來國家が成熟すれば、地文的、又は言語、民族、宗教等

により國境を整理し、國防線を短縮し、又は天然の障壁を國境として國防線を固め、單一なまごまごつた國家を作り上げるものであるが、未開地の拓殖、占領等の場合は、實地に探検を経ないから、素よりかゝる境界は出来ない、そこで單に地圖上で境界を定めることがある、その時は便宜上から經緯線(例カナダと米國及びアラスカの境、米國、カナダの中部、西部諸州、濠洲各州の境、樺太日露境界等)ある二點を結ぶ線(南米、アフリカ各地の境界)、圓弧(例威海衛租借地背域勢力圏の境界)等を選ぶことがある。又軍事上、經濟上の理由から、國境短縮の原則に反して殊更に半島狀の突出地を作る例は元ドイツ領南西アフリカのカプリヴィ楔狀地(Caprivizipfel、之はザムベシ河の可航點にタツプする爲)、同カメルン北部(之は隊商交通の要地なるチャッド湖に達する爲)、米國メリーランド州西部(之は拓殖の動脈たるポトマッ

ク河の要地を扼する爲)、ボリヴィヤの西北部に於て見ることが出来る。(二)歐洲に於ては中世封建時代の遺物としてあつた小國、飛地、入り込んだ國境等が漸次整理されて單一になつた、その手段として、ドイツでは關稅線の擴張を行つた。この點から云つてヴェルサイユ條約が東プロシヤをドイツの飛地としたことは、強てポーランドに海港を與へる爲に無理をしたもので、明かに現代的國境作製の原則に反し、將來の破綻の緒を與へたものである。(四)民族自決主義、即ち地方語を元として小國を建設することは、バルカン小民族の自治運動及びベルギーの獨立に始まり、世界大戰に至て、小國が雨後の筍の如く群生した。大戰後の境界は主として民主的民族主義とも云ふべき民族自決に由て定まつたもので、その方法として、人民投票の如きものまで行はれた。之を要するに、前項(一)に述べた帝國の發達といふ場合の外、腕

力が地圖の着色を變更する場合は比較的少いのであつて、デンマーク、スイス、ポルトガル、オランダ、イスパニヤ等の弱國の境界が最も安定してゐることを見ても之を知ることが出来る。

七、傳 説

國民的結合、獨立、敵意等の回想は國民結合の潛勢力として、何か事が起ると國民の記憶に呼び起される。煽動的の愛國者、宣傳好きの歴史家は數世紀前の記録、傳説等を繰返してある民族が嘗て同一の國家を組織し、又はある他の民族の爲に悲惨な境涯に突き落され、又は祖先の英雄的行動に由て國民に榮光の輝いたことを誇張し、又は英雄、愛國者の説話を眞偽取り交せて語ることは東西何れの國にもあることである。之等の歴史、傳説は小民族の獨立の際にその理由となるものであるが、世界大戰後に於ても、ダンテツヒをドイツ

より奪ひ、ポーランドの東境を定める場合等に用ひられた。

八、人 種

人種は普通には境界成生の重要因子とするが、私はこの點についてはギルフィランと同様に、民族、言語、慣習等を除外して純然たる人種で境界が定まる場合は極めて少いと思ふ。歐洲に於て、普通チユートン、ラチン、スラヴ等の種族を分つのが例であるが、之は人種の差別にあらずして、言語、文化、傳統の相違である。歐洲の相隣接してゐる國民間には、民族(Nationality)の差は認められるが人種(Race)の差は分らない。地球上各大陸夫々固有の人種がある。日本人と米國人とは人種が著しく違ふ、海を隔つる日本人と支那人、又は北歐人と南歐人とは人種上かなり差違がある。然し人種の區別は恰も氣候の變化と同様に漸移的

であつて、ある山脈や河で全然異なるものでない、アルプスを隔てて異なるのはラチン系統の言語とドイツ系統の言語である。リプラーの如きも歐洲の人種を僅かに、地中海系、北方系、東歐系に分ち得たゞけである。(Ripley; *Races of Europe*. Deniker; *Races of Man*. PP. 299—358) 故に人種が國境を定めるといふのは極めて少ない。

九、經濟上の必要

現代の國民的獨立には、海港の必要は勿論であつて、海港を奪はれたボリヴィアはチリーと紛争が絶えない、ヴェルサイユ條約、サンジェルマン條約等は、多くの國際河川を作って、海港を持たない國民に海へ接近する道を與へたといへ、スイス、オーストリア、チエツコ・スロヴァキヤ、ハンガリーの如き海港を持たない國民のあることは將來紛争の種を蒔いたものである。將來商業交通

が主として航空による場合には、海港の必要がなくなるかも知れないが、少くとも近世は、各國民共海港を所有する様に境界を作つたものである。その海港も凍結しない、他國から封鎖されない自由の海に面する所に設けやうとしたことは、ロシアが、バルチック、地中海、中アジア、極東に於て多年苦慮した所で明である。また海港を所有するに就てはその背域に關稅線なく、水路または鐵道幹線の交通を有する様に國境を定めなければならぬ。尙國民の經濟的獨立の爲に、石炭、石油、鐵、食糧の自足自給が出来る様に境界を作らうとする。又ウィーンの如き大都會があるとすれば、その工場の製品市場、原料、食糧の供給地として相當の地域を國內に包含しなければならぬ。更に現代の文明國としては相當の大いさが必要ならば、今も世界各地に所謂僑國とも云ふべき掌大の國がある。その存在の理由は單に人種的特性た

る協同心の缺如(例、中米諸國)、中世の歴史的遺物(例、サンマリノ)、又は山間の餘蘗(例、アンドラ)であつて、太平洋中の孤島に據て御山の大将を極め込んだ酋長國は十九世紀中に凡て整理され、世界大戰に於ても、モンテネグロ、モレーネー中立地の

二小國がツブされた。然るに他方にエストニヤ、

ラトヴィヤ、リスマニアの如き小國が創立されたのは、地方語を國民の基礎とするといふ理由があるにせよ確に時代錯誤であつて、單に勞農ロシヤを苦しめる爲としか思はれない、いづれ之等の小國は時と共に整理されて國境が還元される時が来るであらう。現代文明の特色は分業であつて、分業は專業分化と綜合とに由て成立するものである。小國の簇生はこの傾向に反するものであるが、これには他の理由もある、即ち都市工業の發達の爲に、都市が昔の都市國家の如く隠然たる獨立の勢力を持ち、しかして各國とも工場主が政治上の勢力

を有する様になつたので、之等資本家は、關稅線を自家製品の勢力圏と一致せしめ、自家の製品を他の競争から免れしめやうとする。即ち彼等は國境を都會から僅かに數百哩に定めようとするのである。

十、結 論

以上私の論じた處を結論すると、國境組成の理由が時代と共に著しく變て來たことが明かである。(一)戰爭が空中に擴大されてから、大山脈、河湖、沼澤、森林、更に海洋すらも境界としての意義を失つた、萬里の長城の如き全く歴史的遺物となつた。世界大戰前に全く自然的國境を持つて居たルーマニヤは、大戰後に、面積が約三倍に擴大され、所謂民族的國家を組織したが、その境界は全然地文上の意義がない、同様に元天然の障壁を有して居たハンガリーは、戰後面積三分一に縮少

され、その「障壁」を取り除かれた。この兩國の境界は、地文的境界が如何にその意義を失つたかを物語るものである。(二)征服、併合、買収、相續及び先占等は十九世紀末まで國境制定の重要原因であつて、特に國境は王朝の盛衰に伴つて進退したものであるが、最近この傾向は著しくすたれつゝある。(三)言語の分布を境界とする、即ち、同一言語を用ひる民族を國民の基礎とすることは、民族主義の名の下に、フランス大革命以來、民主主義の勃興と共に盛になり、しかもその基礎とする言語は、文化語から地方語に變じ、隨つて小國簇生の傾向がある。この言語分布を境界とすることは、民族自決と號して、世界大戰後の境界劃定に際し、中歐同盟國及び勞農ロシアの領土に對し徹底的に適用された。(四)境界短縮、即ち領土は成るべくまとまつた形とし、飛地や不規則の國境を整理することが最近の傾向であるが、植民地には、

交通上、軍事上の理由からその例外ともいふべき不規則の境界が残つて居る。只一つヴェルサイユ條約がドイツの國土を兩斷したのは時代錯誤である。今や理想的の境界は國防線の短かい圓又は四邊形と考へられて居る。(五)宗派は文化の發達と共に國民の基礎でなくなりつゝある、但し今も歐洲人の十六世紀時代の文化程度である回教徒は之を國民の基礎として重要視してゐる、かの回教徒社たる Confraternita の如きは、頗る強固な團體である。(六)國民的傳説は益々重要視されて來た。蓋し學校教育の進歩と共に宣傳が利く様になつたからである。(七)人種の差別は國境としては重要でないのであるが、之亦宣傳の爲に相當重要となりつゝある。

(註)

1 Gil Frlan; *ibid.* pp. 466—70. 2 Ratzel; *ibid.* p. 406.

3 Wagner; *ibid.* pp. 730—40.